

25

329

少年論

尾崎行雄著

完

010353-000-2

25-329

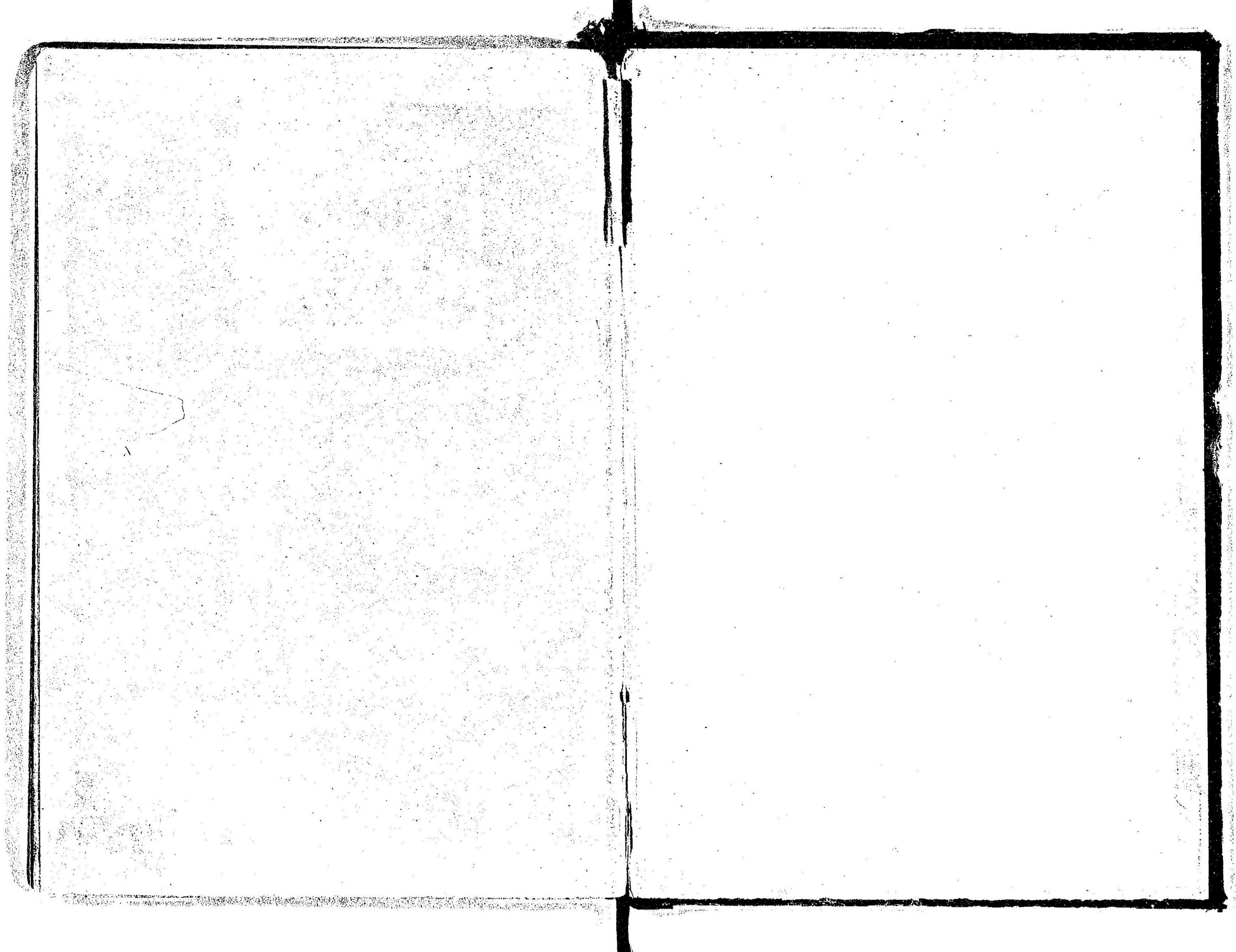
少年論

尾崎 行雄/著

M20

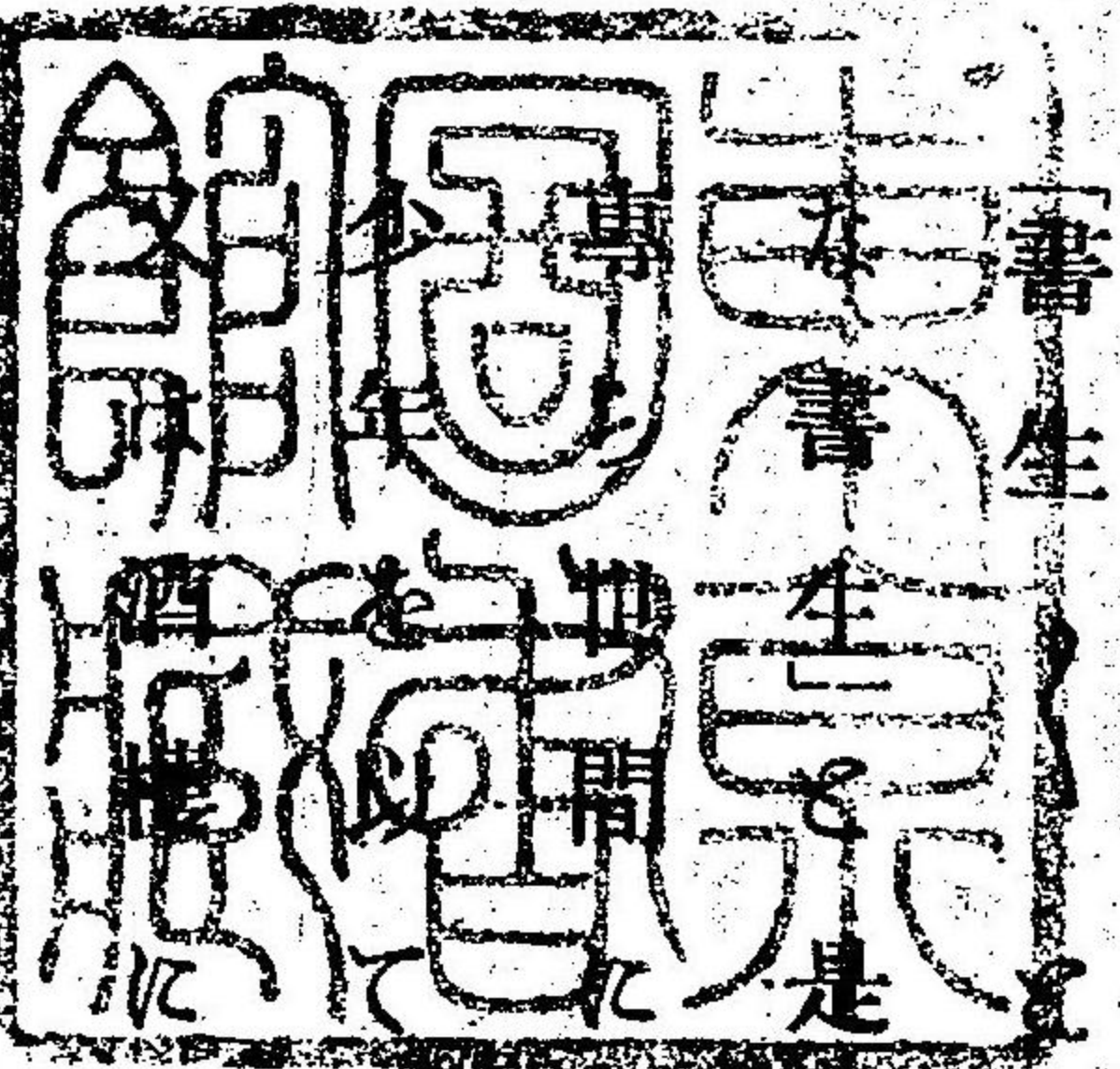
AAE-1769





No 6204

少年論序



書生 輕蔑するな今の太政官は皆
 本書生と是れ明治三四年の頃にあたり
 流行せし俗曲なり當時余は
 府下に遊學し各處の下宿屋
 於て書生の唾壺を敲いて此
 曲を歌ふを聞き竊かに其の意氣の盛ん
 なるに驚きたり蓋し維新の初めにあた
 り廟堂に立つて天下の大政を左右せし

ものは概ね各藩の豪傑にても毫も門地
門閥なく前日までは寒貧の一書生あり
しも己れが才氣膽力によりて直ちに青
雲に上ぼり金刀を帯び鐵馬に騎り叱咤
風を生ずるの勢あり是に於てか各地の
少年も風を聞いて興起し手に唾きとして
一世の事業を成さんと欲せざるは無く
威權の赫々たる廟堂君子を認めて己れ
と同一ふる一書生となしたり假令へ兵

馬の後を承け學術未だ開けず書生は概
ね客氣の爲めに支配せられて其の智識
の缺乏する所ありとよもせよ其の勇敢
進取の氣象あるの一事に於ては決して
今日軟弱なる書生と日を同うして語る
べきに非るなり爾來歲月を經過し明治
政府の其の基礎を確定するに及び出で
て得意の地に立つ者は僅かに全國中一
部分の人々よて當途者と直接の關係を

有せざれば如何に自ら抱負する所ある
とも鬱抑して其の才氣を展はすの道あ
く其の民間に立ち政事上に奔走するも
のは度々の艱難に際會して自ら方向を
誤るに至れり是に於て世の書生は復た
獨立獨行の氣象無く僅かに區々たる藝
能を以て一身を立て一家を成さんとし
るに過ぎず其の進んで國家の大事を擔
當せんとするの大望心あるものとは

落々として晨星に異ならず蓋し今の書
生を以て之を明治初年の書生に比すれ
ば學問技藝に於ては或は大に進歩する
所あるべきも其の氣象の活潑なるに至
つては夙かに相及ぶ能はざるなり今や
天下昌平無事あるが如くなれども外交
上の艱難は愈よ急にして愈よ大あらん
とて内政の如きも大識見あり大氣力あ
るもの出て、之を擔當せざるべからず

後來此任に當るものは維新の前後に功
 名を成せし人に非ずして今日下宿の樓
 上に立籠る血氣の少年あらん夫れ區々
 たる學問と經驗を以て自ら甘んト口に
 卷烟草を咬へて龍動巴里の交際社會の
 有様を誇稱し舞踏宴會の間に狂奔する
 者の如きは之を度外に放棄して可あり
 後來政事上に向ふて其の力を盡すべき
 責任ある少年にして毫も氣骨無く其の

柔弱ある婦人の如くかれは其れ將た我
 邦の前途を如何んせん是れ學堂兄の慨
 嘆して少年論の著ありし所以にして此
 の書の如きは誠に後進子弟の爲めに頂
 上に一針を加へしものと謂ふべきあり
 然れども今よりして政事上に向ふて其
 の力を展べんとするには是非とも十分
 の學問あり智識と氣力の兼ね備るを要
 す學堂兄の大聲疾呼する所は要するに

弊を矯め過を匡すの微意に外あらざる
 がり若し今日の書生に向ひ一の客氣に
 依頼して天下の大事を處すること求
 むると爲せば善く此書を讀むものに非
 るなり歲月の經過するは流星飛丸の如
 く諸君が大業を成就するの機會は已に
 眼前に在り今の社會の上流に立つもの
 は皆な廿年前の少年なりしことを知り
 智識才力氣象を以て進んで之を壓倒す

るの道を思へ

明治二十年十月廿日

鐵腸記す

緒言

余の嚮きに少年論三編を著はして朝野新聞に掲ぐるや聊か世上の感稱を博せしものと見江之を求むる者陸續社前に群至し數百の殘紙忽ちにして一紙て留めざるに至れり尋て續少年論二篇を掲くるや亦前例の如し爾後既に四句て闕すと雖とも購求の客尙ほ社門を叩く社員小篠氏世人の愛顧を背かんを恐れ

余に計るに再刊の事を以てす余乃ち欣然許諾と訂正を加へ更に壯士の勢力及び責任と題する一篇を附加して氏に授く。前五章は皆な余か意を授て筆記せしめたる者にして自ら筆を執りたるは結末の一章に止まる故に議論文章自ら精粗の別あきに非ずと雖も余が持論たるに至ては則ち一あり

丁亥中秋

學堂居士誌

少年論

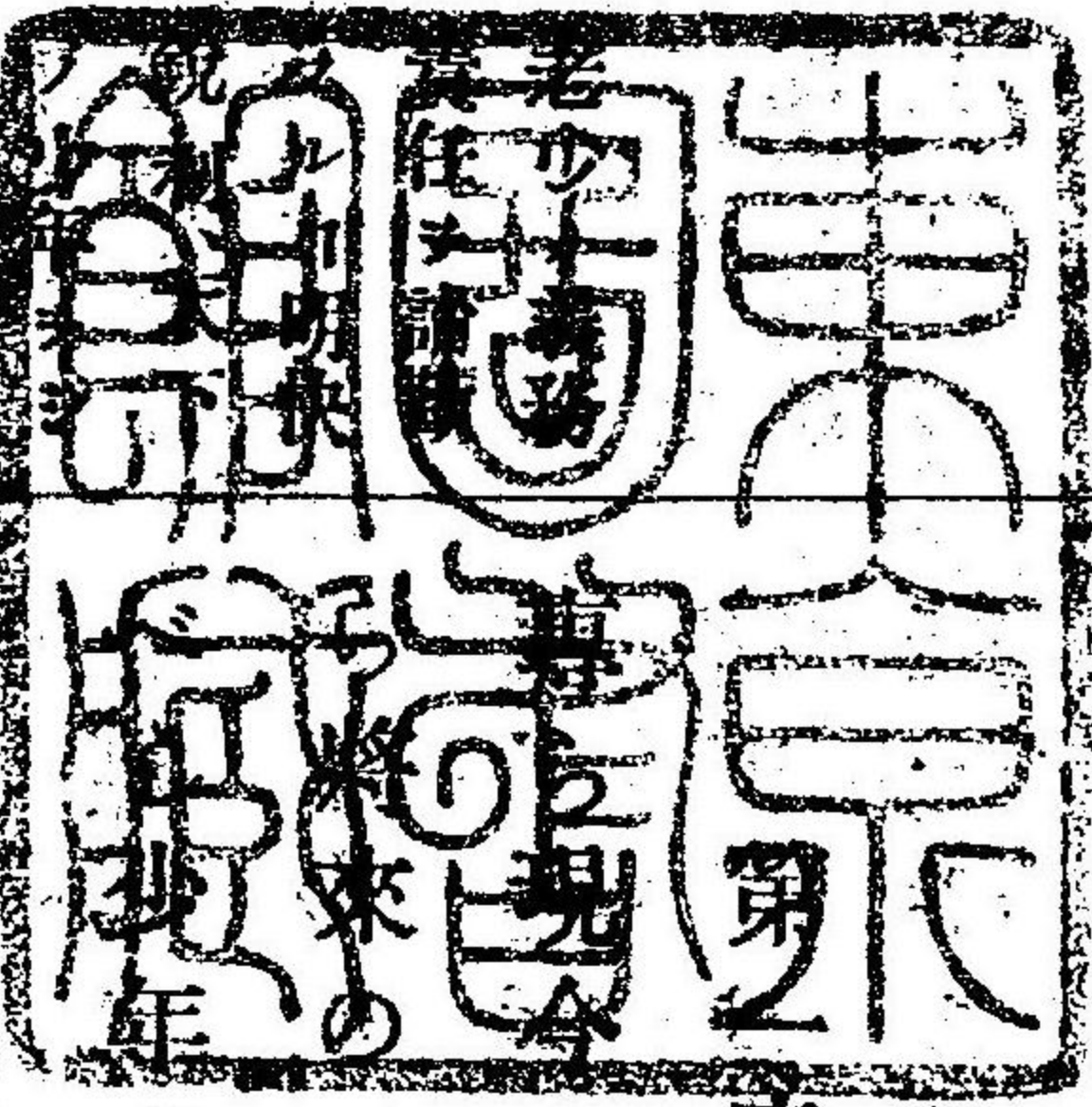
目録

- 第一章 社會と少年の關係
- 第二章 時弊と少年の關係
- 第三章 既往及び現在の少年
- 第四章 少年の無氣力なる最大原因
- 第五章 老人と少年の關係
- 第六章 壯士の勢力及び責任

目録畢

少年論

學堂尾崎行雄著



テ九鼎大呂
ヨリ重カラ
シム

第一章 社會と少年の關係
の日本を經營する者は壯年以上の人なり專
日本を經營すべき者は今日の少年なり見る
の國家に對する義務責任は之れを壯年以上
の人に比するに唯だ現今と將來との差あるのみにて
毫も大小輕重の別なきことを否か國家の前途を推考
すれば益々多事紛擾なるべきの形勢あり靜隱無事か

鴨脰雖短、不可補之、鶴脰雖長、不可截之、老者持重、少者銳進、剛柔并須、天下之事始成、造化之配劑可謂妙矣、

二
る現在の日本社會を經營する所の老成者流は比すれば少年の將來に負ふ所の義務責任豈に大にして且つ重からざらんや想ふに沈着持重の計畫を立て、世事を經營する者の老成者ありと雖ども之れに活潑激烈なる少年の意思を混和するにあらずんば其の弊や流れて因循姑息と爲る而して因循姑息の流弊の社會を害するは猶ほ肺肝の病の人身を害するがごとく其の弊一時は現はれずと雖ども漸衰漸弱必らず其の生命を失ふに至る然らば則ち少年の義務責任は専ら將來に在りと云ふと雖ども其の現在に負ふ所のものも亦

少年ハ眞ニ貴重ノ配劑ナル哉

た、決して淺少なりと云ふべからざるなり世の少年者流其の責任の此の如く重大なることを知らず動もすれば空々寂々として貴重の日月を透過する者あるは何ぞや
因循姑息の弊害を矯めて沈着持重の利益を全ふするものは活潑壯快ある少年の言行なり社會にして苟も此の配合劑を缺く時は聖人ありと雖ども遂に老衰疲弱の憂を防止すること能はず故に少年の國家に於けるは何れの時と雖ども其の必要を見ざるはなく今日の時勢は於て特に其然るを見る何となれば今の時勢

は變化の時勢なればあり進歩の時勢なればなり舊を棄て、新に移るの時勢なればなり上は制度法律より下は衣食住の細目に至るまで悉く變化改良を要するの時勢なればあり而して舊態に泥んで遷ることを好まざるは老成者流の常情なり故に事を其の爲す所に一任ずれば變化改良の進歩自ら遲鈍ならざるを得ず我れよ比すれば遠く先發の勢を制する所の歐米諸國は駸々乎として駟馬も尙ほ及はざる長足の進歩を爲すに方り半開不文の位置に在る所の本邦にして若し遲鈍の進歩に安んぜば前後遲速の懸隔は必ち多矣淵萬

本邦少年ノ
爲メニ氣ヲ
吐ク萬丈

里の差を生ずべし故に我國今日の時勢は最も遲速の進歩を爲さざるべからざるの時勢にして之れを爲さんと欲せば勢ひ少年の活潑壯快なる言行に依頼せざるべからず是れ何れの邦國と雖ども少年の勢力を要せざるはあけれど本邦目下の形勢は之れを要するものと遠く歐米諸國に過るあり世の少年者流其の義務責任の斯くも重大なるを知らず動もすれば空々寂々とあて貴重の日月を送過する者あるは何ぞや泰西の思想文物は其の内情外形全く東洋の思想文物に異なり故に久しく東洋風の空氣に養成せられたる

老成者流は之れを理解領得すること極めて難く聰明
 叡智の人と雖ども之れを見聞して其半を領する能は
 ず況んや尋常一様の人物をや之れに泰西の思想を移
 さんと欲して千萬言を費すも結局馬耳東風たるに過
 きず見よよく世の老成者流は風潮の爲めに漂流せら
 れて知らず識らず文明の彼岸に達せんとするの状あ
 りと雖ども其の進退擧止は總て己が心意よ出るに非
 ず唯だ風潮の刺撃を被つて然るのみ故に少年少もく
 活潑の運動を休めて世上の風潮稍や其の勢力を減す
 れは彼の暴流者たる老成人士は忽ち方向を轉變て東

是レ老人ノ
 心胸ヲ看破
 シタルノ言
 ナリ

眞箇好適例

三ツビ何ツ
 ヤノ結問辞
 ナ疊用シ益
 々重ナ少年
 コ加フ議論
 愈々警拔ナ
 ルヲ覺フ

洋の思想文物は復せんとするに非ずや今を距ること
 三四年以前支那學遽かに其の勢力を恢復せんとした
 るが如きは以て之れが適例と爲すべし而して進歩改
 良の風潮を作る者は少年あり少年の本邦今日に必要
 あること豈に歐米諸國の比からんや然るに世の少年
 者流其の義務責任の斯くも重大あることを知らず動
 もすれば空々寂々として貴重の日月を送過する者あ
 るは何ぞや

社會の表面に立ちて事務を執る者は壯年以上の人な
 り進歩改良の風潮を作つて之れを指揮命令する者は

諭得妙、人
ヲシテ願ヲ
解カシム

罵得痛快、
世ノ輕薄無
腸男子ヲ嘲
殺ス

少年なり其の時勢に通ずるの一点よりして云ふ時は
少年は人形使ひにして老成者は人形ありと評するも
敢て不可なき筈あるに我少年諸子の無氣力あるや人
形使ひの位置に在りながら却つて人形の爲めに左右
せらるゝの奇觀あるとせず是れ畢竟其の位置責任の
極めて重きことを知らざるが爲めあり苟も之れを知
らば焉んぞ俳優講師の徒を尊敬し其の假聲を使て
得意を鳴すが如きとあるべけんや泰西人の如く年齢
七八十に達するも尙ほ矍鑠として世事に奔走するこ
とを得るの躰格を有せば二十歳前後に於て尙ほ乳臭

一世ノ少年
ヲ罵盡シテ
顔色ナカラ
シム然リト
雖も少年ナ
愛シテ其極
ニ達スル者
ニ非スルハ
此苦口ノ良
藥ヲ進ムル
能ハス

を脱せず童氣を帶ぶるも或は可なりと雖も吾が目
本人は年齒僅かに六十前後に達すれば既に頽然とし
て老ゆるの人種なり少年十五廿時歩行奪取胡馬騎の
氣慨あるに非ずんは何を以てか一生の短かきに大事
を遂行することを得んや然るに今日の少年は泰西人
の如き童氣も無ければ去りて亦た幕府時代の少年
の如き大人氣も無く其の因循ある所は老人に似て其
の無思想無氣力なる所は童子に似たり故に其の元氣
益々衰弱して活潑敢爲の氣性を失ひ進歩改良の風潮
を作つて老成者流を指揮誘導すること能はず却つて

之、れ、が、後、へ、に、附、從、と、て、其、の、命、令、を、奉、承、す、る、の、形、情、あ、り、嗚、呼、社、會、の、動、力、と、も、謂、ふ、べ、き、少、年、に、し、て、尙、ほ、此、の、如、し、目、下、世、勢、沈、滯、と、て、百、事、皆、な、因、循、姑、息、を、極、む、る、も、蓋、し、怪、し、む、に、足、ら、ざ、る、あ、り

第二章 時弊と少年の關係

守株膠柱の陋見を固執して徒らに變化を是れ忌む者素より非なり輕躁浮薄にして猥りに變化を是れ好む者亦た可なりと謂ふ可からず成を守るは老人の長所にして業を創むるは少年の長所なり創業守成は國家を維持する所以の二大要素にして二者其の一を缺く

少年ノ價值
益々重シ

時は國家到底衰亂を免かれず若夫れ創業の要素獨り跋扈して守成の要素に乏しからん乎社會常に動搖して靜着休止の時なかるべく之れに反し守成の要素獨り跋扈して創業の要素に乏しからん乎社會萬般の事悉く停滯して進歩改良する能はざる可し而して國家の進歩は活動に生ず其腐敗衰弱は停滯不動に生ず而して少年は創業の氣象を代表し老人は守成の氣象を代表する者あり少年の國家を維持するに於て與つて力あること豈に一步も老成者流に譲らんや世の少年たる者宜しく浮佻輕薄の陋習を掃蕩して深く自ら任

少年ノ價值
益々重シ

所謂ル新日
本即チ是レ
ナリ

すべきあり
特に今の日本は創業世界にして守成世界にあらず進
んで新奇の事業を創起するにあらずんば退て成を守
らんと欲するも一も守つて以て國家を富強あらむ
るに足るべき事業あきあり果て然らば今日の日本
は創業の氣象に富める少年の當に擔任すべき所に
て彼の守成の氣象に富める老人の當に擔任すべき所
に非ず言辭を換へて之れを云へは今の日本は少年の
日本にして老人の日本にはあまざるなり然るに世の
少年者流動もすれは事を老成者流の成す所に一任を

滔々天下皆
是レ也俗物
ノ跋扈スル
亦タ異ムニ
足ラサルナ
リ僕曾テ詩
アリ云フ世
上勿皇多俗
士人間快
恬幾男兒
又云フ遠圖

て毫も頓着せざるが如きは何をや吾輩の深く少年諸
子の爲めに惜しみ且つ怪む所あり夫れ諸子只た事
を老成者流の爲す所に一任す故に眼を擧げて中原の
形勢を觀察すれば我日本仍如きは特に迅速の進歩を
要すと雖ども遅々として進まず殆んど老牛の一步一
喘に似たるあり加之からず世人多くは活潑敢爲の元
氣を沮喪して毫も進取の氣力をく畢生の心願唯だ一
身の安樂を計るに過ぎざるもの、如く然り斯くの如
くにして因循日月を經過せば歐米諸國に對する貧富
強弱の懸隔は日に益々大にして毫も之れを減するを

不講富強、
 策姑息、且
 欣安樂高、
 皆ナ士氣、
 廢額シテ俗、
 物國ヲ害ス、
 ルヲ憤フル
 ヲ出ツ
 少年ノ責務
 大ナルコト此
 ノ如シ豈ニ
 一日モ優遊
 空過シテ可
 ナラシヤ

得ず、土耳其、埃及の衰勢遂に免かるゝこと能はざらん
 とす而して之れを救ふの計只だ一あり少年固有の長
 所たる慷慨激烈活潑敢爲の氣象を振作して之れを老
 人固有の長所たる沈着特重の氣象に混和して以て其の
 因循姑息に流るゝを防ぐにあるのみ世の少年たる者
 若し之れを以て自ら任せざれば社會は只だ守城の老
 氣を存して創業の壯氣を蓄めず沈滞靜停の極、腐敗せ
 されは必らず衰死すべし然るに世の少年諸子徒らに
 長短を俳優若くは講談師の假聲に争ひ奮然躍起して
 滔々たる此流弊を救ふを知らず甚だ心きは即ち老

眞個此小人
 アリ吾レ其
 面ニ唾セン
 ト欲ス
 少年ハ幾ン
 ト是レ救世
 主

成、着、實、の、假、面、を、装、ふ、て、俗、人、の、歡、心、を、買、は、ん、と、欲、す、る
 に、至、る、卑、屈、無、氣、力、の、極、と、謂、ふ、べ、し
 本邦今日の弊患は守成の老氣跋扈するに在り而して
 之を救ふは少年固有の活潑敢爲の氣象を注入するに
 在り今日の弊患は人々皆を元氣を沮喪して因循姑息
 に流るゝに在り而して之を救ふは少年固有の慷慨激
 烈の氣象を注入するに在り然るに世の少年生たる者
 斯る重大の責務を以て自ら任するをば爲さず却つ
 て酒色の間に貴重の日月を消過し恬然恥ぢざるもの
 滔々皆を是れあり其の俊秀にして意を世事に用ゆる

憾ムラクハ
一タビ慷慨
義烈ノ壯士
ナシテ一拳
ナ彼ノ卑屈
無氣力ナル
俗物ノ頭上
ニ陷ルハシ
ザルチ

者、と雖、も徒らに老成着實の假面を装ふて風俗を瞞
過せんと欲するに過ぎず豈に痛嘆せざる可けんや想
ふに如何ある人物と雖も固有の長所をきはあらず
我が短所を以て人の長所に當らんとすれば到底勝算
を得べからずと雖も人の短所に當るに我が長所を
以てすれば凡夫も猶ほ賢者と拮抗するを得べし今ま
少年如何に穩當着實の假面を装ふる決して之れを以
て老人と拮抗を得べきにあらず之れに反して老人如
何に慷慨激烈活潑敢爲の氣象を振作するも決して之
れを以て少年に當り得べきにあらず蓋し穩當着實は

是レ少年ノ
奉シテ以テ
六韜三畧ト
爲スヘキ者
ナリ

老人固有の長所にして慷慨激烈活潑敢爲は少年固有
の長所を我はかり果して然らば老成者流と對立して
勝を制せんと欲するの少年は故らに我が短所に就い
て穩當着實の假面を装ふ可からず宜しく活潑敢爲の
長所を以て彼れが短所を攻む可きなり單に老人と對
立して勝を制せんと欲するもの猶ほ且つ然り況んや
國家の流弊に於て苟も憂ふる所あるものに於てれや
然るに少年中の俊秀ある者毫も慷慨激烈の氣象を振
作して滔々たる流弊を矯正せんとは力めず却つて穩
當着實の假面を装ふて俗物の歡心を買はんと欲す吾

輩皆だ其の心事の卑劣あるを嘆するのみならず亦た
 對戰の兵器に拙さを嘆むるなり寄語す世の俊秀少年
 、穩當着實の氣象若し今日に必要ありとせば何んぞ
 老成人士をして獨り世事を専らにせよめざるや諸君
 如何に巧に穩當着實の假面を装ふも假面は到底假面
 たるを免かれず之れを老成人士の眞面目に比すれば
 固より三舍を避けざるを得ざる爲めに問ふ世の俊秀少
 年諸君は今日の時世を視て創業の時世といふ爲さざる
 や活潑の運動を迅速の進歩を要するの時世といふ爲
 さざるや今日の流弊は幾幾激烈なる事多し而て却て

自ラ假面ヲ
 装フハ尙ホ
 可ナリ假面
 ナリ者ノ
 爲メニ過
 セラレテ己
 モ亦タ假面
 ナシ義ナ
 ク節ナク
 儻ノ如ク
 命ノ如ク
 至テハ幾
 ド怒スル
 道ナキ也

因循姑息に在ることを知らざるや諸君にも其苟も之
 れを知らば何んぞ穩當着實の假面を装ひて愈々流弊
 を助長することを爲さぬ諸君にして苟も其の政譽を
 改めざる以上は國家決して富強の途に上るを能はず
 諸君決して其の勢力を増加するを能はざるあり
 第三章 既往及び現在の少年
 老成者は慷慨激烈活潑敢爲ある少年の氣象を得て始
 めて因循姑息の通弊を免かるゝを得べく少年は沈着
 持重ある老人の氣風を得て始めて過激の通弊を免か
 るゝを得べく老少相ひ和みて各々其の本分を盡し

一方の長所を以て他の短所を補救して功業始めて期すべきなり老人の勢力強大に過くれは世事沈滞して迅速の進歩を爲すこと能はず少年の勢力強大に過くれは世態動搖して真正確實の進歩を爲すこと能はず此二類の人物が國家に負ふ所の義務責任蓋し亦た大ありと云ふべし然るに今日の少年者流は老人に壓倒せられて其の當さに使用せざるべからざる勢力を失墜し國家の利害休戚を傍觀して毫も與り知らざる者の如く然り試みに想へ孔明が天下三分の計を懷て南陽高臥せるは享年二十六七の際に非ずや莫相ヒツ

トが出で、天宰相の實權を握れるは二十三、四歳の時に非ずや此他具氏の如き微候の如きも亦た二十二、三歳にして政治世界に雄飛するの端緒を發けり若し和漢洋古今の歴史に就て此等の事迹を尋ぬれば僕を更ふるも枚擧に遑あらざるべし我が今日の少年者流豈に之れに對ちて冷汗背に透るの思ひなきを得んや人或は云はん右擧ぐる所の如きは皆を天下有數の俊傑にちて千百年の一人あり豈に之れを以て廣く世上の少年を規すべけんやと蓋し非を掩ふの遁辭あるのみ知るや否や其の目的百里の外に在て實効五十里の内

少年頂門ノ
一針

巧保身ハ則
ナレバ
明哲ノ二字
ハ冠シ難キ
ニ似タリ呵
々々

此止まるは吾人の常患あることを然るに今ま俊傑を以て自ら期せず凡夫を以て自ら居らんとす吾れ其の造詣する所の極めて卑近にして尋常の凡夫とたも爲ること能はざらんを恐るゝあり吉田松陰詩有り曰く
事雖半古人、功則倍古人、不唯七雄際、
思之心悲辛、如何今君子、明哲巧保身、
是れ王政維新前の述作なりと雖も其の意を推究す
れは恰も今日の爲めに作れる者の如きを覺ふ凡る利害
國家變革の際此等此睡りて功業を收むるに最も容易

讀レバ此ニ
至レハ人ヲ
シテ踴躍止
ム能ハサラ

嘲罵輕快

なるの時期なり政治上、理財上、社會上、事業上、萬般の變革凡て目下に迫り今後數年を出でずして世事悉く其の面目を一新せんとするは今日の形勢にあらざるや是れ有爲の士は取つては千載の一遇とも謂ふべき好時機にして所謂ゆる事雖半古人、功則倍古人の時勢あり然るに世上の少年者流、平和の武器を執つて偉大の功名を収めんとは努めず却つて茫漠無爲の間は貴重の日月を送過し其の稍や俊秀あるものと雖も徒らに老成着實の假面を装ふて俗物を瞞過せんと欲するに過ぎず松陰氏をして此の状景を見せしめば如何今措

大、狡、猾、巧、保、身、と罵り去らんも亦た未だ知るべからざるなり

今ノ少年須
ラク明治近
世史ヲ熟讀
シ維新前後
各藩浪士ノ
快瀾勇壯ナ
ル舉動ヲ觀
察スハ庶幾
セクハ腐敗
セル柔腸ヲ
洗フテ生氣
ヲ回復スル
ヲ得ン

戊辰鼎革の前より方て國事に奔走せる者の言行を觀察すれば瑕瑾素より多しと雖ども其の若齡の身を以て自ら國家の重きに任じ勇往奮進毫も一身の利害を顧慮せざるに至つては吾輩深く其の慷慨果敢なるに服するあり吉田松陰は臥龍出盧の年齡に前後するの少年を以て大藩の士氣を鼓舞し橋本左内は二十四五歳にして既に隱然朝野の重きを負へり此他屍を十津川の寒月に曝らし骨を生野の銀山に埋めたる者多し

は皆な白面書生に非ざるはなし唯た今日の時勢は當時の時勢に異なり長劍を揮つて

秋なればこき紅葉をも散らすあり

我が討つ太刀の血けぶりを見よ

と朗吟するが如きは志士の固より爲すべき所にあらずと雖ども三寸不爛の舌を以て三尺の劍に代へ五寸の筆を揮つて敵黨の堅壘を擣くが如きは今の時勢に適應するの處置あり國家多難の今日に方り徒らに寄席劇場の遊覽を快とし下宿屋の二階の空論に安んずるは王政維新前の少年に對して慚つべきの極にあらず

一讀壯快、
匣中長劍欲
鳴、

明治政府ノ
内閣諸大臣
ハ皆ナ多ク
ハ當時ノ壯
年ニシテ活
潑勇壯雷轟
電掣ノ學動
ヲ以テ政治
改良ノ偉動
ヲ奏リ今日
人ナリ

少年ガ國
事政治ヲ憂
ヘテ日夜奔
走スルハ所
謂乃公ノ志
志ヲ繼クモ
ノニシテ喜
ビコソ怒ル
決シテ今
日ノ少年ハ
宜ク益々激
勵シテ諸公
奏功ノ偉蹟
ニ倣フベシ
復タ何所カ
之躊躇アル
ラカ

すや

議論より、實を行へ、なまけ武士、
國の大事を、よりに見る馬鹿、
此の歌激にして、且つ卑しと雖も、以て今の少年者流
を戒しむるに足れり、
首を回らせは、僅々二十餘年前に過ぎずと雖も、當時
に在て、専ら國事に奔走、以て回天の偉功を奏せる者
は、概ね皆な紅顔の少年なり、王政維新の大變革は、慷慨
激烈、活潑、政爲ある少年の手に成れる者あり、若し少年
の勢力をして、今日の如く微弱ならしめ、其の意氣を

て今日の如く、因循卑屈ならしめ、維新の大業、恐らく
は容易に成就せざりし、からん雲霧を排して、白日を現
はし、吾人を、以て此の清明天地に生息することを得せ
しめたる者は、大抵皆、少年志士の功あり、今日の少年
若し其の志を、繼ぎ奮然自ら進んで、國家の重きに任ず
るに非ずんば、維新の大業も中道にして、其の光輝を滅
ぶ變革改良の功、未だ半に到らず、して既に、停滯退却の
憂ひを生ずべし、苟も此の如くんば、現在の少年は、皆に
既往の少年の罪人たるのみならず、亦た國家不忠の臣
民なり、然りと雖も、今の少年は、皆な國事に冷淡に

て唯だ一身一家の逸樂を是れ慮るに非らず偶々社會の空氣の腐敗に制せられて因循日月を經過するのみ若し人あり奮然蹶起して之れに率先せば四圍の人皆な懶睡を覺まして活潑敢爲の氣象を振作するは必然の勢ひなり嗚呼天下の事常に先鞭を着するの士なきを憂ふ眞木和泉曰はずや

れくれをはは色も櫻に劣るらん

いそぐそ梅の匂ひなりける

と世間誰れか先鞭を着して梅花と同じく魁春の芳名を収むる者を吾輩の見る所及び少年諸子に望む所凡

そ此の如し諸子尙ほ遁辭を設けて抗辨せば吾輩復た何をか云はん唯た

心をはこゝろに問ひて正せかど

我れはかりよく知るものはあも

と答へて止まんのみ

第四章 少年の無勢力ある最大原因

吾輩は今の少年が固有の長所たる活潑敢爲の氣象を抑へ故らに老成着實の風采を装ふて世に媚ふるの不可あるを論せり其の言稍や激あるに似たりと雖ども固より惡意ありて少年諸子を誹謗したるにあらず蓋

名言至理古
人ノ未ダ曾
テ道破セサ
ル所ナリ

し斯く云ふ著者も亦少年社會の一人にて平生老成者
流の因循姑息あるを痛憤するものなれはなり議者或
は曰ふ故らに銳氣を抑へて老成着實の体面を裝ふも
猶ほ老人社會に容れられざるを憂ふ若し活潑敢爲は
少年固有の長所なりとて充分に此の氣象を發露せば
其の社會の爲めは擯斥せらるゝこと果して如何をや
是れ深く思はずんはあるべからざるありと吾輩窃か
に以て誤れりと爲す抑も國家の因循に流れず激烈に
失せず恰も其の中道を進むことを得る所以の者は老
少二流の人互に其地歩を維持し相ひ對立し

諂諛ハ人ニ
容レラル、
ヲ求ムル計、
中ノ至拙ナ
ル者タルヲ
知ラス阿諛

る所なきに因れり然るに年少氣銳の人若し其の敢爲
の氣象を壓抑して老成者流に諂はゞ老成者流の言行
獨り社會に跋扈して毫も少年の言行を留めざるに至
るべし苟も斯くの如くならば世に少年を存するの利
益果して安くにか在るや天の少年を生トたるの意恐
らくは之をして老成者流の奴隸たらしむるに在らざ
る可きのみ
人に容れらるゝの計は單に諂諛の一方に止まらざる
あり否な諂諛は計中の至拙なるものあり然るに今の
少年諸子は其の活潑壯快なる老象を振作として氣成者

詔倭唯命惟
レ從フテ以
テ其容レヲ
レシヨリテ求
ム其志憫ム
可ク其愚笑
フ可シ
媚世ノ少年
宜ク三復ス
ベシ

流を驚服せしむることを知らず却つて其の鼻息を窺ひ其の言行に摸擬して一顧の憐を乞はんと欲せ豈に卑屈の最も甚たしきものに非ずや吾輩常に謂ふ少年諸子の其の活潑壯快なる氣象を屈抑して老成者流に容れらるゝは寧ろ縦横自在に之れを發作して其の擯斥を受くるに如かずと假令ひ擯斥せらるゝも必ず多少老成者流の意想を動かして之れを以て進取の氣象を發起せしむることを得べければあり而して之れが爲めに社會を利するの効能は固より天真を喪ひ盡して半死の老人に媚ふるの比類にあらざるなり夫の幕府

眞然々々

議論一層ハ
一層ヨリ切
ナリ夏雲奇
峯ヲ捲クノ

の末路に當り劍を按つて慷慨悲歌せる年少氣銳の徒を以て若し其の天真を枉けて老成着實の氣風を摸擬せしめは王政維新の大功を慶應の末年に奏すること能はざりしや必せり三百年の積弊を掃蕩して明治中興の基を開けるは少年諸子の功あり否な當時の少年諸子が枉げて老成着實の氣風を裝はず勇往奮進毫も顧慮する所をかりとに因れり
今の少年は智慮の足らざるを患へず經驗の足らざるを患へず事務に老練ならざるを患へず唯だ自任の心に乏しきを患ふ自ら任する所苟も重ければ固有の長

所を屈抑せずと雖も老成者決して之れを擯斥する
 ことを得ず諂諛媚嫵の醜態を學はずと雖も世間素
 より之れを容れざるを得ず因循姑息の弊風社會に跋
 扞せんと欲すと雖も少年の元氣に刺撃せられて到
 底跋扞すること能はざるあり想ふに擧止進退を斷ず
 ること輕急にして其の志想の數を變轉するは少年固
 有の短所あり而して其の基く所を尋ねれば自任の心
 未だ深からざるに在り自ら任ずる所を苟も重か
 らしめば事の利害を斷ずる決して彼れが如く輕急な
 らず其の思想決して彼れが如く數を變轉せざる可き

自任ノ二字
 一篇ノ眼目

堂々論客ヲ
 以テ自ラ居
 ル者尙ホ其
 節ヲ變シ言
 シ食ム者多
 シ況ンヤ其
 他ナヤ
 方今少年ノ
 通弊説キ得
 テ神ニ入ル

あり且つ老成者流の之れを擯斥して任ずるに大事を
 以てせざるも亦た職を以て是れに之れ由れり自ら任
 ずること輕くして人の己れに任ずることの重からん
 を望み自ら敬すること少くして人の己れを敬すること
 の多からんを望む是れ豈に今日少年諸子の通弊に
 あらずや古人云はずや人自ら侮つて而して後ち他人
 之れを侮ると今の少年諸君は自ら侮るものあり自ら
 任ずること極めて輕きものあり其の世間の爲めに輕
 侮擯斥せらるゝも亦宜からずや
 幕末の少年は勤王討幕を以て自ら任せり故に能く此

史乘ノ實例
ナ列舉シテ
古今英雄自
任ノ高ヲ示
ス議論益々
剴切ヲ覺フ

の大功を奏せり臥龍孔明は天下三分の計を以て自ら
任せり故に能く玄德を援けて蜀吳魏鼎立の形勢を作
ることを得たり頼朝義経は流離漂泊の少年生に過ぎ
ずと雖ども平氏を斃して宿怨を雪ぐの事を以て自ら
任せり故に能く其の功績を奏する~~能~~を得たり此他
和漢洋の史籍に就いて其の例証を~~不~~得むれば少年の
成就し得たる大勳偉績實に枚擧に遑あらず而して其
の能く之れを成就し得たる所以を尋ぬれば只だ自任
の二字に在り今の少年諸子其れ之れを思へ

第五章 老人と少年の關係

議者或は曰ふ少年をして枉げて其の銳氣を抑へしむ
るも尙ほ輕急粗暴に流れんことを恐る若し之れをし
て抑束する所なく社會に跋扈せしめは妄變濫改底止
する所を知らずして社會は之が爲めに動搖不定の憂
ひを被むるべしと此說一理あきまありさるが如しと
雖ども吾輩決して同意する能はざるあり維新以降制
度法律を始めとし世間萬般の事悉く動搖不定の憂ひ
を被むれる所以の者は唯だ年少氣銳の徒専ら世事を
幹旋したるが爲めのみに非ず職として一朝突然鎖港
の長夢を覺され睡眠朦朧として恰も五里霧中に彷徨

するに際し既に早くも泰西の制度文物を移入するの
 必要に遭遇せたるに之れ由るあり此時に方てや假令
 如何なる老成着實家をして其局に當らしむるも素よ
 り昨是今非朝に令して夕に改むるの過失を免かれざ
 るべし況んや王政維新以來今日に至る迄の歴史は老
 少軋轢の歴史にして其の勝敗強弱の勢ひ屢々變轉し
 たるれや社會が動搖不定の憂ひを免かれざりしは當
 然必至の理なるのみ

若し老成者流をして常に其局に當らしめは泰西文明
 の事物の本邦に入ると決して此の如く迅速をあらざ

るべし假令動搖不定の憂ひを被むるも之れを遅々と
 して進まず東洋古來の陋習を株守するよ比すれば其
 利固より多し日本の進歩の支那に比して甚だ迅速な
 りしは其原因一にして足らずと雖ども年少氣銳の徒
 が世事の局面に當れるの一事も亦た其大原因ならざ
 るを得ず果えて然らば王政維新の功績を慶應の末年
 に奏することを得たるも少年諸子の力與つて多きに
 居れり爾後盛んに泰西文明の事物を移入することを得
 たるも少年諸子の力與つて多きに居れり二十年の大
 平に昏醉して上下頗る遊惰に流ると雖ども國家未

今日滿天下
ノ少年中既
往ノ少年ニ
對シテ耻ナ
キモノ幾ナ
ド稀ナリ

だ全く其元氣を喪亡するに至らざる所以の者も亦少年諸子の力興つて多きに居れり諸子の既往に奏せる功績は此の如く其れ多し將來の事業若し之れに添はずんは將た何の面目あつて既往の少年に見んんとする乎

驕奢懶惰は目下の通弊にして其國力を衰亡せしむること實に大あり而して其原因は少年の勢力大に衰弱したるに在り蓋し老成者は既に多少の事業を成就したるの人にして將來之れを成就せんとするの人にあらず故に功名の志自ら小にして前途の望亦た自ら少

あからざるを得ず功名の志薄ければ難苦し堪ゆるの氣力随つて薄弱あらざるを得ず前途に属する所の望み少なければ切磋琢磨の志自ら減少せざるを得ず是れ老成者流の動もすれは驕奢懶惰に流れて餘生を緑酒紅燈歌舞逸樂の間に送過せんと欲する所以あり果して然らば驕奢懶惰の弊風社會に流行するは前途無望ある老成者流の社會に跋扈するが爲めなり此弊風を矯正して勤勉活潑の美風を獎勵するの大任に當るべき者は前途多望なる少年諸子に非ずして誰をや夫れ少年は事業を將來に成就すべきの人にして既に之れ

を成就したるの人にあらず故に因循爲すまゝ空をく
 日月を消過せは其の身は草木と同く朽敗して天下
 後世復た一人の其の姓名だも記する者あかるべし而
 して男子の汚辱は身死して名後世に傳はらざるより
 大なるはあはれ是れ少年者流の功名心に富み萬般の望
 みを擧て前途に屬する所以なり唯だ其れ功名心に富
 む故に如何ある艱難辛苦と雖ども之れを忍ぶの氣力
 あり唯だ其れ前途多望あり故に目前の快樂を貪つて
 身体名聲を毀傷することあはれ是れ目下の弊風は少年
 進んで之れを矯正するの大任に當らざるべからざる

議論明快毫
 髮遺憾ナシ

所以あり然りと雖も世の少年皆な斯の如き意氣あり
 此の如き大任に當り得可しと云ふは非ず少年たる者
 は斯の如き意氣あかる可からず此の如き自任心な
 かる可からずと云ふのみ苟も自ら任ずること重きの少
 年あらは其身を處すること必らず吾輩の右に述たる
 所に違はざるべし

今日の少年を以て維新以前の少年に比すれば其の因
 循卑屈にして自任の心に乏しきこと實に驚くべしと
 雖ども是れ獨り諸子の罪のみにあらざるあり維新以
 前に在つては老成者流の門望高き者は實力あく實力

百尺竿頭、
 更ニ一步ヲ
 進ム

之ヲ戴クノ實
ニ可ナリ之
ヲ拜シ之ヲ
崇メテ先覺
者ノ奴僕ヲ
ルニ甘ンズ
ルニ至テハ
男子ノ腸既
ニ全ク腐レ

ある者は門望卑くして其の志を當世に行ふこと能はざりし者多し故に少年の事を爲すや必らずしも老成者流を戴いて其の首領と爲すことを要せず假令之れを戴くも單に門望を以て戴かれたる首領は麾下の士を容易に其の意向を動かすことを得たり今や則ち然らず朝野に在つて重きを負ふの士は大抵皆を實力を有するの老成者にして苟も之を戴くにあらずんば俊才逸足の少年ありと雖ども廣く世間の認承を受くること能はざるあり既に世人の認承を得ること能はず其の大事を遂行すること能はざるは當然の理勢あり且

タリト云フ

此ノ如ク論
シテ方今
ノ少年始
テ死ノ憂
テ免ルベシ
活意ノ如シ

此一論ナカ
ル可ラズ

つ今日上流の位置を占むる所の勢望實力兼備の老成者ハ單に門望有つて實力なき従前の首領と違ひ少年の身を以て之れを動かすこと極めて難し左りとて之れを戴かざれば世人の認承を得ず之れを戴けば我が意見に據て之れを動かす難きの憂ひあり是れ今の少年の進路を横斷する所の一大困難に非ずや論トて此に至れば吾輩亦た廣く世人の信任を有し名望隆熾ある老成者に向つて望む所なき能はず何ぞや曰く因循姑息の通弊を脱却して敢爲活潑の氣象を振作すること即ち是れあり若し然らずして因循爲すなく日月を

送過せば徒らに少年志士の進路を妨害して活潑有爲の氣象を喪亡せしむるに足らんのみ寧ろ高蹈勇退して餘生を花鳥風月の間に送るに如かざるあり

第六章 壯士の勢力及び責任

慷慨激烈死を視る歸するが如きものは是れ壯士と謂ふべき乎、曰く然り、強を畏れず弱を侮らず好んで人の急に赴くものは是れ壯士と謂ふべき乎、曰く然り、切齒扼腕大聲壯語をて正を揚げ邪を抑ゆるものは是れ壯士と謂ふべき乎、曰く然り、口角沫を飛ばし舌端風を生る日夜國家の利病を談論して一身一家の事を顧慮せざるも

豪壯逸宕讀
ミ去テ紙上
雲捲キ雷轟
クサ覺フ

世ノ壯士ヲ
以テ自ラ任
スル者豈ニ
負任ノ極テ
重大ナルヲ
思フテ輕急

の是れ壯士と謂ふべき乎、曰く然り、壯士の資質は甚だ多くして其の勢力は至大至剛以て世の風潮を左右し以て社會の輿論公議を動かすに足れり世間若し壯士あるものなくんば俗物權を専らにして俗氣社會に充満し諂諛者は愛せられ卑屈者は用ひられ世人唯だ營々役々として螻蟻に均じきの生計を營むに至るべきのみ今日風紀亂れて人心腐敗し倫安姑息の弊風社會に横被すと雖ども國家尙ほ未だ老衰の悲況に沈淪せず政治社會尙ほ幾分の生氣を留むる所以の者は他か、慷慨激烈豪宕敢爲なる壯士あつて時々晴天の霹靂

粗暴ノ言行
ヲ慎マサル
可シヤ

を欺くべし沈痛の言行を爲し以て俗物の耳目を驚破するに因るなり嗚呼壯士をかつせは國家何を以てか老衰疲弱の患害を免るゝことを得ん夫れ壯士は社會の動氣あり國家の生力あり國に壯士あるは猶ほ天に雷電あるが如し陰雲怪霧結んで解けざるに方り一震一撃忽ち之を駁散して青天白日を現出せしむるは是れ雷電の力に非ずや俗氣社會に充滿し國家正し倫安姑息の弊患を被むるに方り驚天動地の言行を爲して滔々たる流弊を掃蕩するは是れ壯士の力に非ずや見よ其豪邁あること漢高楚項の如き者

と雖も尙ほ逡巡畏怖するに方り博浪沙の一撃を以て天地を震動し劉項奮起の端を發ける者は子房部下の壯士あり又視よ徳川氏三百年の積威を覆へすの端を發ける者も亦

岩が根も透らざらめや武夫の

國の爲めとて思ひきる太刀

と詠歌せる櫻田の壯士あり誰か壯士の勢力を微なりと云ふや吾輩は唯だ其の至剛至大あるを見るのみ然りと雖も秦初~~末~~は腕力世界にして時勢全く今日に異なり時勢既に異なれば其施す所の手段も亦た

是レ一篇ノ
主眼讀者勿
々看過スル
勿レ

従つて異あらざる可らざるは事理の最も睹易きものなるに世の壯士と號する者動もすれは時勢の變化を知らずして守株膠柱の見を守り徒らに古昔腕力世界に於ける壯士の舉動の痛快あるに心酔して其の移りて以て今の文明世界に用ゆべからざることを知らず動もすれは則ち舊世界の壯士の手段を丸呑みにして其儘今の新世界に用ひんと欲す吾輩の深く壯士諸君の爲めに嘆惜する所なり

今の世界をして純然たる武力世界ならしめ執權者をして毫も文明の利器を用ひず書を焼き儒を坑にするの拙策に出でしめは壯士頑然として舊世界に行はれたる陳腐手段を用ゆるも或は可ありと雖も今や世態全く一變し兵馬の權悉く爲政者の手裏に歸ちて偵察の法、警視の便、幾んど具備せざる所なり此時に方り赤手を揮て帶甲十萬の政府に抗せんと欲す石に向つて卵を投ずるの類なるのみ近時福島、加波山、飯田、大坂等の事件と與せる許多の壯士の着々失敗して一功だも奏すること能はざりし所以のものは職として世態の變遷を知らず守株膠柱の陋見を脱せず今日の新世界に於て舊天地の微弱なる武力を用ひんとしたるに

人ノ力アリ未
ノ力アリ未
ル者アリ未
ダ百人ノ力
チ兼ヌル者
アラズ壯士
ニシテ若シ
單ニ腕力ヲ
頼マハ政府
ヨリ之ヲ視
ルハ小兒
ハナラズ
ニ異ナラズ

之れ由るあり壯士にして苟も區々たる腕力に依頼し
曾て神通無量ある智力に依頼せざる限りは今後と雖
ども亦着々失敗して何等の勢力をも掌握する能はざ
るべし

壯士の職任や重く其の勢力や大なり彼の腕力の如きは諸君が有する勢力中の特に小なる者のみ死を視る歸するが如きは人の世間に有力なる所以の一大原因あり然れ共輕々しく此精神を使用して容易に生命を賭すれば身死して國に益なく草木と同トく朽るの結果あるを免れず慷慨義烈好んで人の急に赴くは人の

世ノ壯士
ル者宜シク
肝ニ銘シテ
忘レサルベシ

世間に有力ある所以の一大原因あり然れども手段を
擇まずして妄に此氣象を用ゆれば志善と雖ども之
に稱ふの功績をからん瓦を毀て塼を畫くの類なるの
み此の他壯士の勢力を解剖して其の組織分子を尋ぬ
れば一にして足らずと雖ども妄用すれば則ち効力を
没し其の強点とは爲らずして却つて弱点と爲る慎ま
ずんはあるべからざるあり吾輩常に謂へらく腕力有
て容易に用ひず死を視る歸するが如くにして容易に
死せず機會を相して雷奔電掣の舉動を爲し以て俗耳
を喝破する則ち是れ壯士の壯士たる所以にして其の

國家を利益する所も亦此に在りと夫の時勢の變遷を辨へずして唯だ腕力に依頼する者も或は壯士の美名を僭することを得べし美名の上は無智の惡名を冠せらるゝを如何せん

之を要するに彼の壯士なる者は國家の元氣、動機、生力にして國家能く老衰疲弱の患を免かるゝことを得る所以のものは畢竟壯士有て社會の懶睡を打破するに因れり、俗物は社會を因循にし壯士は之れを活潑にす、俗物は國家を老衰せしめ壯士は之れを強健あらむ、俗物は人を卑屈にし壯士は之れを勇敢にす、俗物は社

兩者對叙二
者ノ優劣長
短瞭乎トシ
テ火ヲ視ル

カ如シ

會を粉飾すと雖ども其元氣を削殺す、譬へは猶ほ病婦を起ちて花粉を着けらむるがごとく又食を減つて細腰を學はらむるが如し、壯士は社會を粉飾せずと雖も能く其元氣を増加す、譬へは猶ほ松柏の美花を放たざる代りには棟梁の材たるに堪ゆるが如し、俗物は床間の置物にして壯士は棟梁柱石あり、壯士たる者豈に其責任の極めて重く其勢力の至大至剛あるを知て鞠躬盡力する所あかるべけんや諸君が有する強腕健脚の如きは其勢力中の特に細小なる者のみ彼の

いざさらは冥土の鬼と一と軍

一結有味餘
韻嫻々

と遺吟せる山國兵部其人の如きは鬼神をも壓伏する
の意氣言外に溢る快は則ち快なりと雖ども舊世界の
壯士にして新日本の壯士の模範とすべき者に非ざる
なり。

少年論終

跋

今の世界は維新前の世界よあらず今の
少年何ぞ維新前の少年を學ぶ可けんや
是書に謂ふ所有爲の少年なる者は彼の
張臂瞋目高吟濶歩我は天下の書生あり
と誇稱する輩の謂にあらざるなり謂ふ
所敢爲活潑の少年ある者は彼の争鬪毆
打已れを傷け人を害ひ我は天下の壯士
ありと誇稱する徒の謂よあらざるなり

徳義に合ふの行動、道理に出るの勇氣、學問に基くの主義、主義に由るの議論、て以てするに非れは今の老成人に代て國家の事に任ずる明治年間の少年たるを得ざるなり、明治年間少年の國家に負ふの責任、是書之を論ずる詳なり、吾復く何をか言はん

明治二十年十月念二日讀了題 木堂居士

余學堂先生に乞ふて此書を再刊せんとす、偶々博文堂主人來り出版の事を托せんことを請ふて措かず、余曰く余が此書を再刊せんと欲するの微意は他あらず、是論一たび出て、朝野新聞社復た一葉の殘紙なく空しく、志士の需めに應ずると能はざると先生の確論卓説にして、其及ぶ所僅々數千人に止まり、未だ全國各地家讀戸誦に至るを憂ふるのみ、子其

業に居り其事に憤る、者は書を廣布す
る本より余に過ぐるものあらん乃ち欣
然とて之を興ふ

明治二十年九月

小篠清根識

明治二十年十月廿日版權免許
同 年十一月十日出版

定價金十八錢

著者

尾崎行雄

東京府平民

神田區駿河臺南甲賀
町二番地

出版人

博文堂

原田庄左衛門

東京府平民

東京日本橋區久松町
十五番地

發兌人

隨巖堂

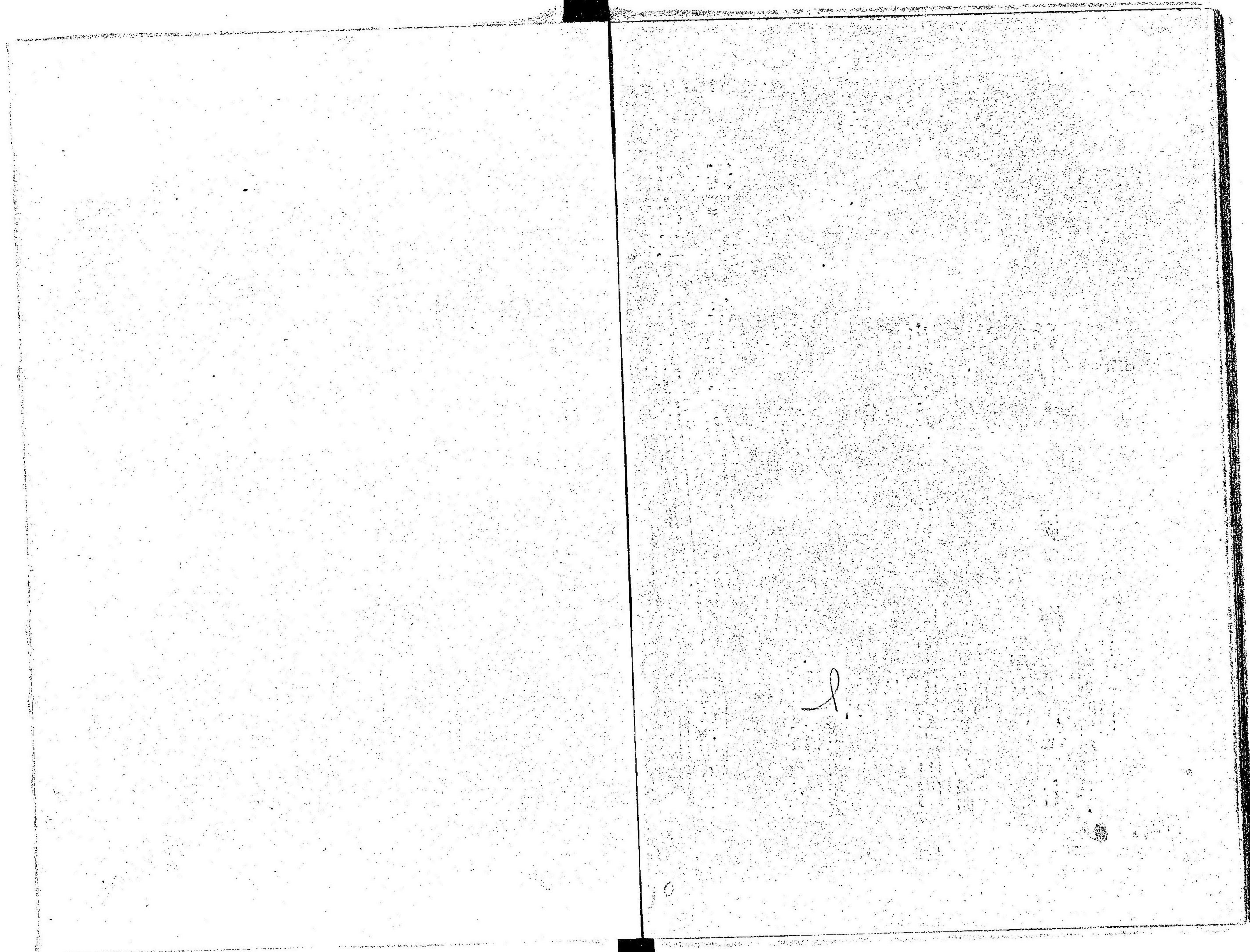
梅原龜七

大坂府平民

大坂東區備後町四丁
目十一番地



22100000



25
329

